

## 【2】 迦絺那という言葉

[0] 言葉というものは、それが指し示すものの本質を表わすものであるから、まず「問題の所在」の(6)に掲げた‘kaṭhina’という言葉、あるいは「迦絺那を拡げる (kaṭhinam attharati)」という言葉が、どのような意味を持つかを検討することから本論を始めることにしたい。

まず迦絺那という言葉については、上に紹介した辞書などの中に、「布を切断あるいは縫製するために拡げることができる木の型枠」などという解釈と、「年に1回献供する法衣用の布地」などという理解が示されているものがあることはすでに見た。この他には、先に紹介した C. S. Upasak 氏は、Kaṭhina (I) の項目を別に立てて、

ローブを延ばす際に用いる木のフレーム。その使用は比丘らのためにブッダによって許された (Cv. p.205)。ブッダは迦絺那衣堂の中で、それを適当に、また注意深く使うことを要請された。迦絺那を無節操に使うことは突吉羅の罪となる (Cv. p.206) <sup>(1)</sup>。と解説している。

また「迦絺那を拡げる」「迦絺那を張る」という言葉については、平川氏は「サンガの全員が協力して1日のうちに木の枠に布を張って衣を縫い、さらにそれを染めて、袈裟衣を作ること」と解釈し、Upasak 氏は「比丘がこれをルールに則って正式に受領したことを示す行為をいう」という解釈をしていることはすでに紹介した。さらに平川氏は『二百五十戒の研究Ⅱ』において、

「迦絺那衣を張る」(atthata-kaṭhina) とは、迦絺那衣を作る台を拡げることと言う。

迦絺那 (kaṭhina) とは、三衣を縫う時の台、あるいは定規のごときものを指すようである。上述のごとく僧伽梨や鬱多羅僧は縦2メートル、横2.4メートルほどの大きさに作るから、布を裁断したり、縫ったりする時、定規のごとき木が必要である。それを拡げること「迦絺那衣を張る」というのであるらしい <sup>(2)</sup>。

としている。

これによれば平川氏は「迦絺那衣を張る」は道具としての迦絺那を拡げて衣を作ることと理解しているのに対し、Upasak 氏は道具を拡げることではなく、それを使って作られた衣をサンガの行事として正式に受領する行為と理解していることになる。

(1) p.059

(2) p.110。また同書の p.542 では、「迦絺那とは、迦絺那衣を縫う時に張る木の枠である」としている。

[1] 以下この2つの言葉を検討してみたい。

[1-1] まず kaṭhina=迦絺那という言葉が原始仏教聖典に求めると、『パーリ律』の「小事韃度」<sup>(1)</sup> に衣の作り方に関する記述があって、ここに迦絺那という道具が登場する。これにふれたところだけを取り出すと、次のような記述がある。

比丘らは処々に杭(柱 khīla)を掘り、衣を結んで、衣を縫い、衣が不正となった (civaram vikaṇṇam hoti)。「比丘らよ、迦絺那と迦絺那綱とを処々に結びつけ衣を縫うことを (kaṭhinam kaṭhinarajjum tattha-tattha obandhitvā civaram sibbetum)

許す」。

比丘らは不平等なところに迦絺那を拵げ (visame kaṭhinam pattharanti)、迦絺那が壊れた (paribhijjati)。「不平等なところに迦絺那を拵げるべからず」。

地上に (chamāya) 迦絺那を拵げ、迦絺那が塵に汚れた (paṃsukitaṃ)。「草の敷き具を許す」。

迦絺那の縁が老化した (kaṭhinassa anto jīrati)。「風にしたがって編むことを (anuvātaṃ paribhaṇḍaṃ āropetaṃ) 許す」。

迦絺那ができあがらなかった (kaṭhinam na ppahoti)。「棒のある迦絺那 (daṇḍakaṭhina)、串 (pidalaka 小棒)、籌 (salāka)、結び綱 (vinandhanarajju)、結び糸 (vinandhanasuttaka) を結んで衣を縫うことを許す」。

比丘らは足を洗わないで迦絺那を踏み、迦絺那が汚れた。「足を洗わないで迦絺那を踏んではならない」。

湿った足で迦絺那を踏んで迦絺那が汚れた。「湿った足で迦絺那を踏んではならない」。

履を履いて迦絺那を踏んで迦絺那が汚れた。「履を履いて迦絺那を踏んではならない」。

露地において衣を縫い、寒暑のために疲れた。「迦絺那堂 (kaṭhinasālā)、迦絺那廊 (kaṭhinamaṇḍapa) を許す」。

迦絺那堂に草と粉とが散乱した。「纏ってから内外から塗り、白色黒色紅土子を塗り、華鬘・蔦・摩喝魚牙・棚 (pañcapaṭṭhika) ・衣架 (cīvaravaṃsa) ・衣綱 (cīvararajju) を設けるを許す」。

そのとき比丘らは衣を縫ってから、そこに迦絺那を放置して去り、鼠・蟻にかじられた。「迦絺那を畳むことを (saṃharitaṃ) 許す」。

迦絺那が壊れた (paribhijjati)。「牛皮に (goghaṃsikāya) 迦絺那を畳むことを許す」。

迦絺那が解けた (viveṭhiyati)。「結び綱を許す」。

その時比丘らは壁や柱に寄せて (ussāpetvā) 去り、迦絺那が倒れて壊れた。「壁杭 (bhittikhīla)、鉤 (nāgadanta) に固着させる (結びつける) ことを (laggetuṃ) 許す」。

また『四分律』<sup>(2)</sup>には「衣枕」「張衣枕」「著衣枕」という衣を縫うときに使う道具についての記述があり、これが迦絺那に相応するのではなからうか。枕とは『諸橋大漢和辞典』<sup>(3)</sup>では「横木」という意味がつけられている。

若し衣を補う時縮むを患えば石を以て四角を鎮おさえて補え。若し故縮せば四角に杙を豎てて之を張れ。若し故縮せば応に杙を作りて之を張るべし。云何に作るかを知らず。仏言く、応に木を以て作るべし。彼れ繩張を須う。仏言く、繩張を与えて之を縫うを聴す。……彼れ衣を縫う時曲るを患う。繩墨を拵つかつて直ならしめるを聴す。彼れ緝縷を須う。仏言く、応に与うべし。……若し中央が不定ならば応に尺度を以て量るべし。……彼れ衣を張るに地に著して縫塵衣を空す。仏言く、泥漿を以て地に灑ぎ已りて張るを聴す。彼れ衣を縫う時鍼地を刺して壊る。仏言く、爾すべからず。彼れ賒婆羅草上に於て衣を敷いて縫い草衣に著す。仏言く、爾すべからず。彼れ衣を草上・葉上に敷き草葉を合せて縫う。仏言く、爾すべからず。十種衣中の一一の衣、若しくは伊梨延陀・耆

羅・耄耄羅・毛氈を上に乗いて縫うを聴す。彼の比丘繩墨・拏縫・尺度・縷縫・針・刀子・補衣物の零落を患う。仏言く、囊を作りて盛るを聴す。彼れ衣枕を挙げず雨漬す。仏言く、応に収挙すべし。何処に挙るかを知らず。仏言く、経行堂中若しくは温室・食堂中に安著するを聴す。張衣枕大にして戸受けずして入るを得ず。応に外の無雨処に置くべし。若し風雨飄漬せば応に高く懸くべし。彼れ衣を補い竟りて衣を解き余木を取りて挙げず。仏言く、応に挙ぐべし。何処に安著するかを知らず。仏言く、閣下若しくは床上に安著せよ。彼れ繩索を挙げず。仏言く、応に著衣枕に捲繫して之を挙ぐべし。

と記されている。

衣を作る時にはまさしく木杵を使っていたことがわかる。

- (1) *Vinaya* vol. II pp.116~117、南伝 04 pp.178~180
- (2) 大正 22 p.953 下、国訳 04 p.107
- (3) p.6038

[1-2] 以上の記事から、kaṭhina=迦絺那とは木でできたフレームのようなものであったということがわかる。比丘・比丘尼の衣は長方形のかなり大きなものであるので、このフレームも相当大きなものとなり、そこで普段は畳んだり、あるいは重ね合わせたりして、それを紐で括って、倒れてこないように壁に鉤を付けてそこに結びつけてあったのであろう。そして衣をつくる時にはいくつかの迦絺那をつなぎ合わせるとか、延ばすとかして使ったのであろう。そして衣がまっすぐにでき上がるように迦絺那の上に綱を張ったのであろう。したがって「迦絺那を拡げる」とか「迦絺那を張る」というのは、この畳んである迦絺那を拡げつなぎあわせることを意味するように見える<sup>(1)</sup>。

以上のように理解すると、‘kaṭhina’のそもそもの原意は‘hard, firm, stiff’であったこともうなづける。衣を切断したり、縫ったりする時には布をしっかりと固定しなければならず、この固定する道具が迦絺那と名づけられることはごく自然であるからである。

- (1) 先に「迦絺那を拡げる」と訳した原語は‘kaṭhinam pattharati’であって、漢訳律蔵が「迦絺那を受ける」とか「迦絺那を張る」と翻訳する言葉に対する『パーリ律』の原語は‘kaṭhinam attharanti’であり、必ずしも同一の言葉ではない。しかし‘attharati’はā-√strに分解され、‘pattharati’はpa-√strに分解され、同じ語源を有するから、これらが異なった意味合いをもつものとは考えられない。

[2] 以上のように、「迦絺那」とは衣を作る時にそれを固定する木の杵、いわば木組みの裁縫台であって、「迦絺那を拡げる」「迦絺那を張る」というのは、畳んであった裁縫台ないしは裁縫の時に用いる木杵を拡げる、張るということの意味するように見える。

しかしながらなおここには次のような問題が隠されている。1つはパーリ語で表現される「迦絺那を拡げる」は他の漢訳律では「迦絺那衣を受ける」と訳されることである。「迦絺那を拡げる」なら迦絺那とよばれる道具を拡げることと理解することができるが、しかしそれが同時に「迦絺那という道具を受ける」と表現されるとは理解しにくい。しかも「迦絺那を受ける」ではなく「衣」としての「迦絺那衣を受ける」と表現されるのである。また『根本有部律』では「張る」ということばが使われるのであるが、これも「羯恥那を張る」ではなく「羯恥那衣を張る」というように用いられるのが普通である。衣としての「迦絺那」あるいは「羯恥那」を張るのであるから、「道具としての羯恥那を張る」のではないことは明

らかである。

また迦絺那は衣を作る時に布地を固定する道具であるとすれば、日常的に用いられて然るべきであるが、しかしなぜすぐれて特殊な意味を有しているように見える「迦絺那衣」という言葉にしか用いられないのかという疑問も生じる。『スマナサーラ』がいみじくも、「**出家の衣を作る時は昔は木型を使ってそれもカティナ**というが、カティナ・チーヴァラという場合は、それらの意味に使われているようには見えない。しかし『特別な衣』という意味があることだけは確かである。日常的に布施している衣と全く同じ質のものであるにかかわらず、なぜ『特別な衣』なのか」と問題提起されているように、ここにはより深い意味が隠されていると見なければならぬであろう。

現段階では筆者もこれに答えることができないので、とりあえずはこれだけに止め、ともかく議論を先に進め、この問題についてはその過程において検討することにしたい。